

いつの日も、メッセンジャーたちとともに

東京都／岩寄悦子さん

「こんにちは。いのちのミュージアムへ、ようこそ」

そう言っ、訪れる人たちをいつもやわらかな手で抱きしめてくれる岩寄悦子さん（67歳）。ここへ足を運んだ誰もが、彼女の笑顔と温かさ癒やされます。

「メッセンジャー」と呼ばれる白いパネルは、事件や事故で理不尽に命を奪われた人たちの等身大のオブジェです。足元には彼らが生前に愛用していた靴が並べられ、それぞれの胸元には、元気な頃の写真とメッセンジャーが刻まれています。

「私の息子もメッセンジャーとしてここでお仕事をしているんですよ」

そう話す岩寄さんの傍らには、朝日をバツクに微笑む青年の、白いパネルが静かに佇んでいます。

悦子さんの三男・元紀さん（当時19歳）が、突然、命を奪われたのは、2002年1月のことでした。

泥酔状態でハンドルを握った加害者は、発進後すぐに追突事故を起こします。しかし、ヘッドライトを消して猛スピードで逃走。その途中、



廃校になった白草台小学校（東京都日野市）の3階に開設されている「いのちのミュージアム」。写真の左側に立っているのが、15年前に事故で亡くなった息子・元紀さんのパネル。

今度は原付バイクで走っていた元紀さんに後ろから衝突したのです。

「人を引きずりつてるぞ、止まれ！」助手席の同乗者はそう呼びかけたそうです。でも、加害者はそれを無視し、元紀の身体を90mも引きずって逃走を続けました。その瞬間の、恐怖と苦痛……。あるとき止まってくれさえすれば、元紀の命は助かったかもしれないのに（岩寄さん）

加 害者はその後、事故後に飲酒

で日本酒を飲み干し、ガソリンスタンドに隠れているところを逮捕。当初は過失で起訴されましたが、極めて悪質な事件として東京都初の「危険運転致死傷罪」に変更され、懲役8年の実刑判決が言い渡されました。

「お母さんの煮物はおいしいね」いつもそう言ってくれた元紀。私は事故の後、台所に立って、ご飯を炊くこともできませんでした。春に桜が咲いても薄墨色、人の波を見ても黒い蟻（あか）しか見えなかったのです」

色彩のない世界……。かろうじて人の心を取り戻すまでに、3年以上

の歳月が必要だったといえます。

あれから15年、岩寄さんは今、いのちのミュージアムの理事を務めながら、全国の矯正施設で被害者のパネル展を開催。受刑者たちに命の大切さを伝える活動を続けています。そして、条例研究会の仲間と「犯罪被害者等支援条例」をすべての自治体に作る活動にも力を入れています。

「多摩市では元紀の事故をきっかけにこの条例が作られました。理不尽な死はなんとしてもくいと止めたい。でも、万一のと看、全国どこで被害に遭っても平等に支援を受けられる、そんな世の中になってほしいのです。ですからあともう少し、元紀と一緒にがんばろう、そう思っています」



元紀さんが事故時に持っていた携帯電話。15年たった今も元紀さんがセットした時刻にアラーム曲『天国の涙』が流れる。